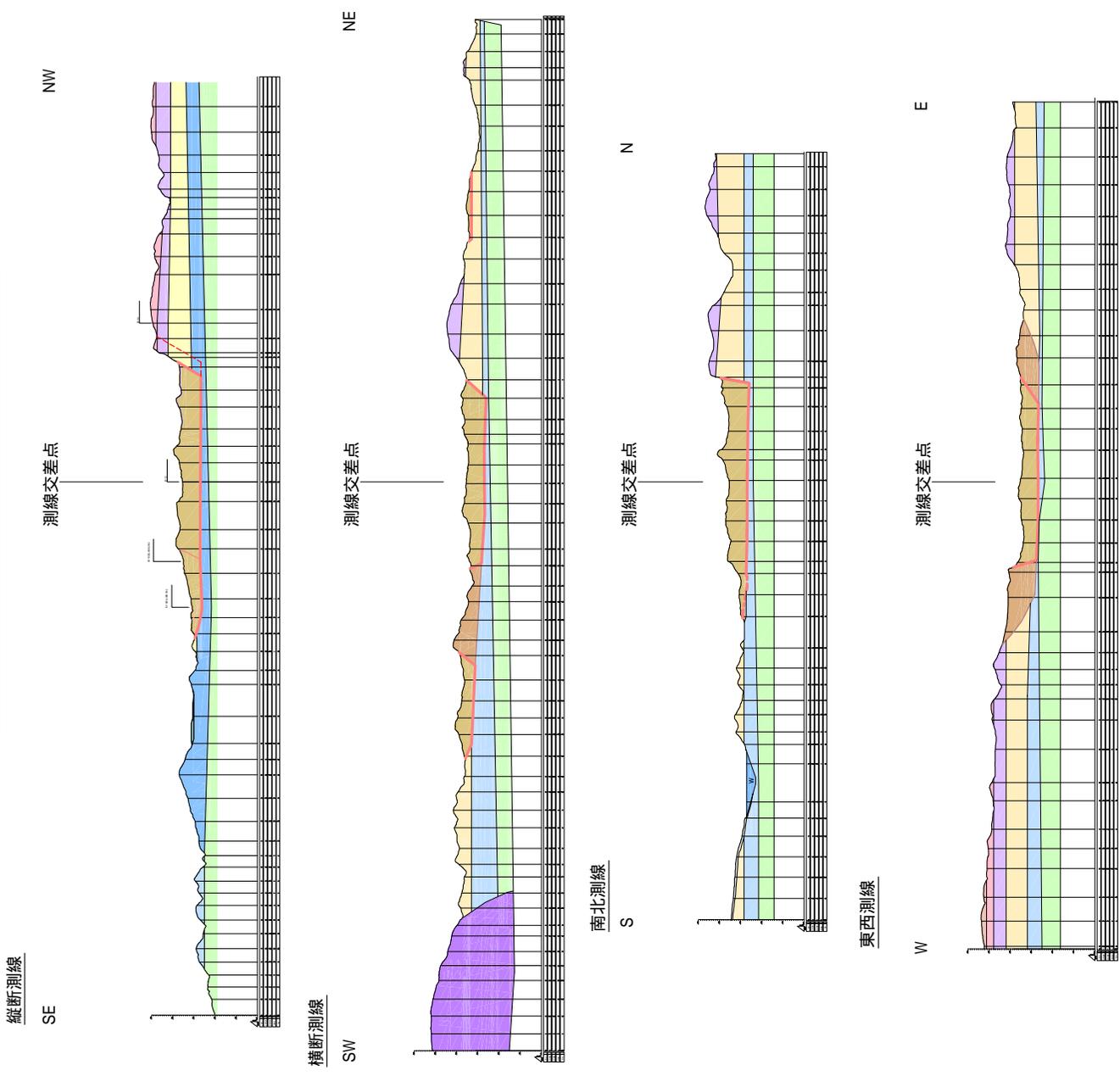


荒砥沢周辺地質断面図 S=1:20,000



- | | | |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 河床堆積物・盛土等 地震時滑動土塊 旧地すべり土塊 崖錘堆積物 | <ul style="list-style-type: none"> 溶結凝灰岩 (非溶結部含む) 未固結火砕流・堆積物 および降下火砕堆積物 安山岩質凝灰角礫岩 ～凝灰岩(泥流堆積物含む) 溶結凝灰岩 (北川溶結凝灰岩) | <ul style="list-style-type: none"> 軽石凝灰岩 砂岩シルト岩 凝灰岩 貫入岩 |
| 完新世 | 更新世 | 更新世～中新世 |

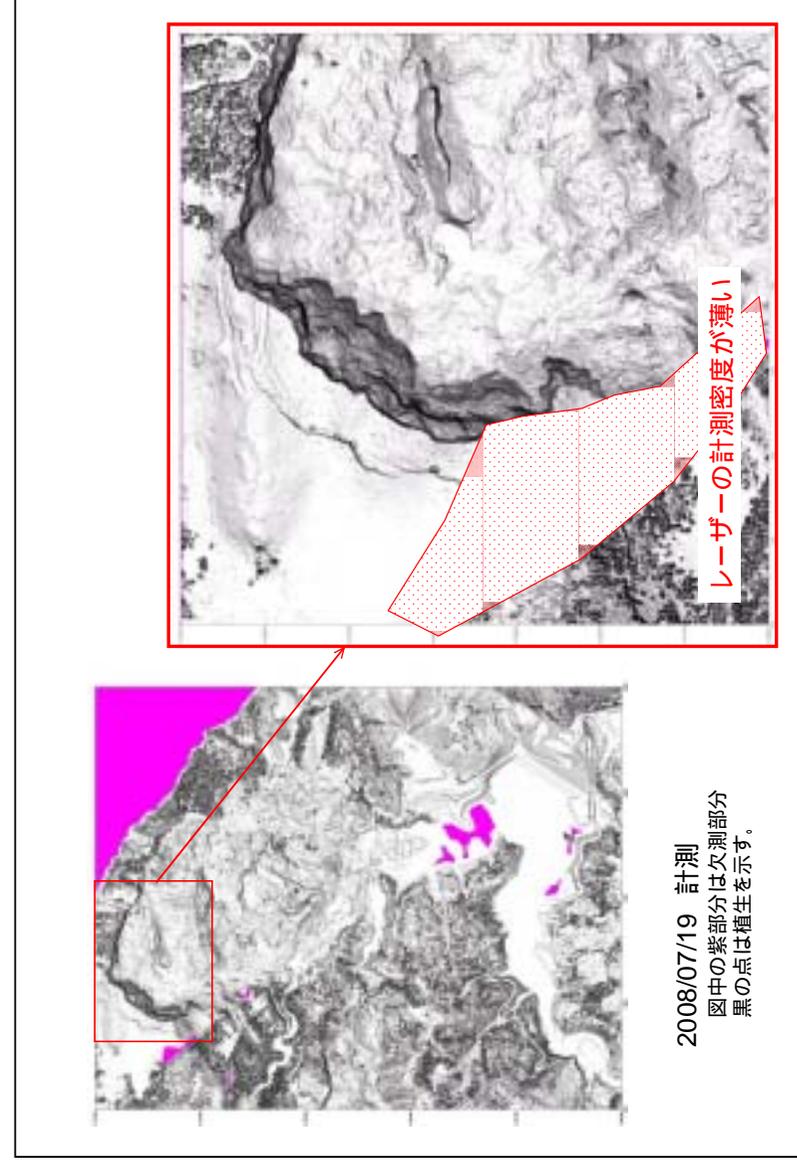
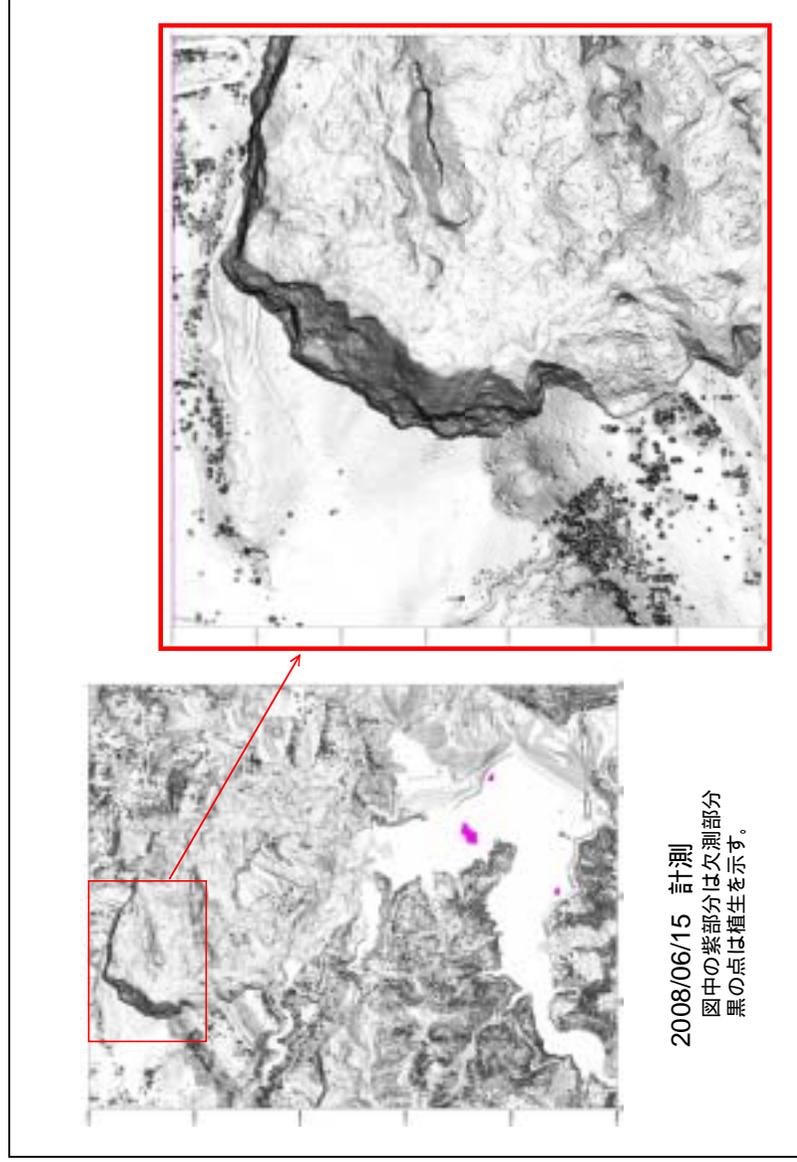
- 地震時滑動ブロック
- 地震断層
- 旧地すべりブロック
- 走向・傾斜

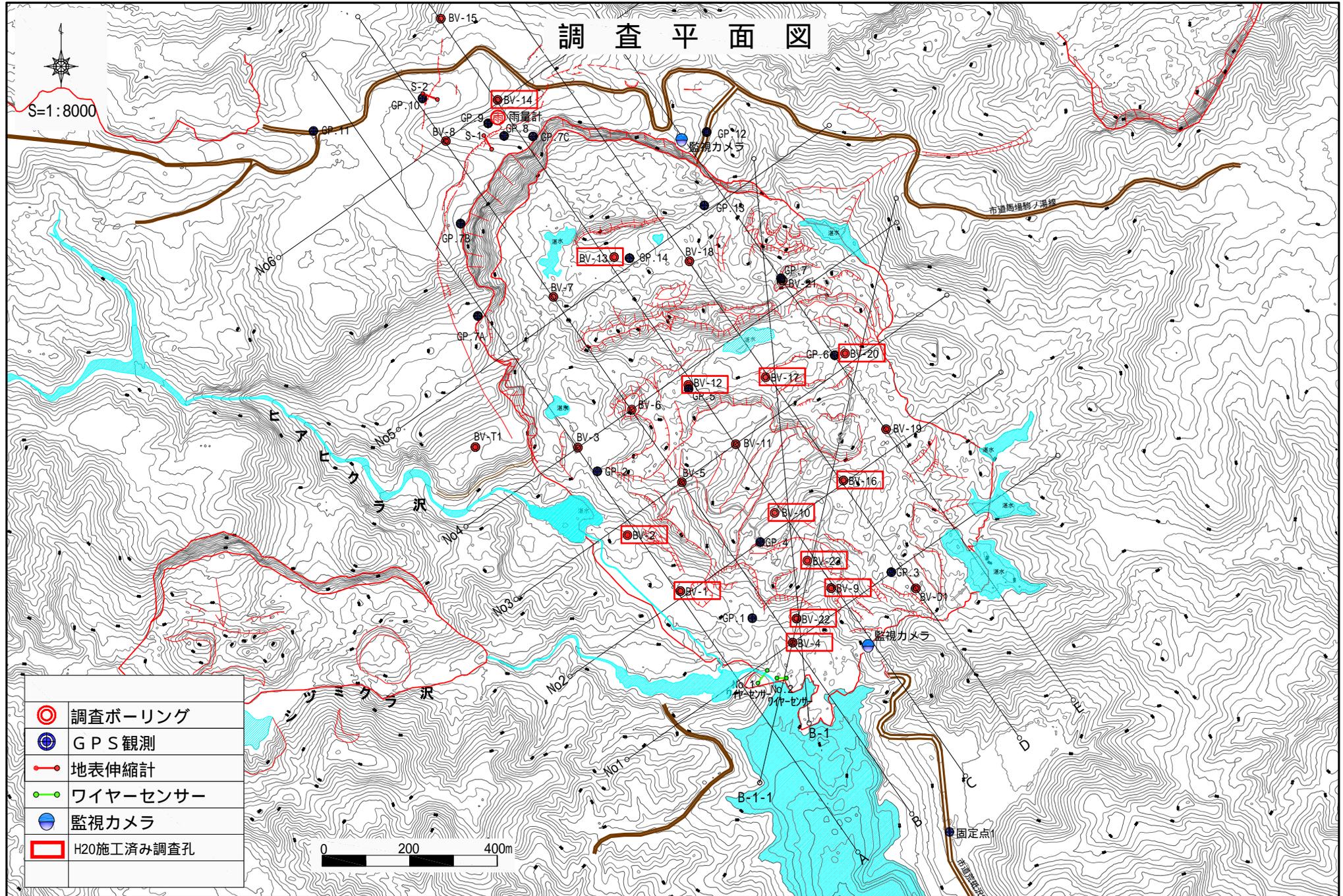


2.5 地質断面図

レーザープロファイラによる変動量比較

2.6 レーザープロファイラによる変動量比較



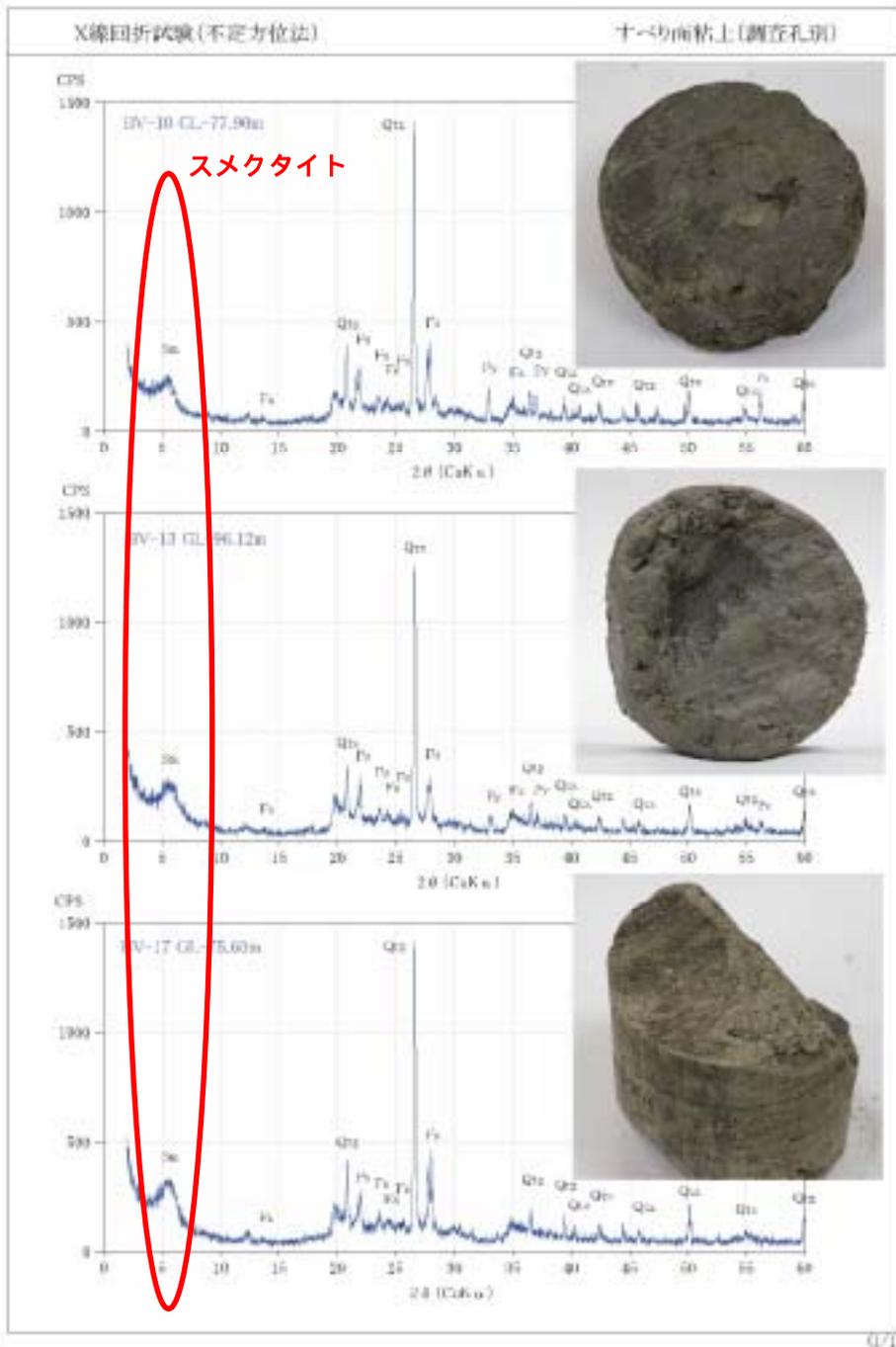


2.8 すべり面判定一覧表

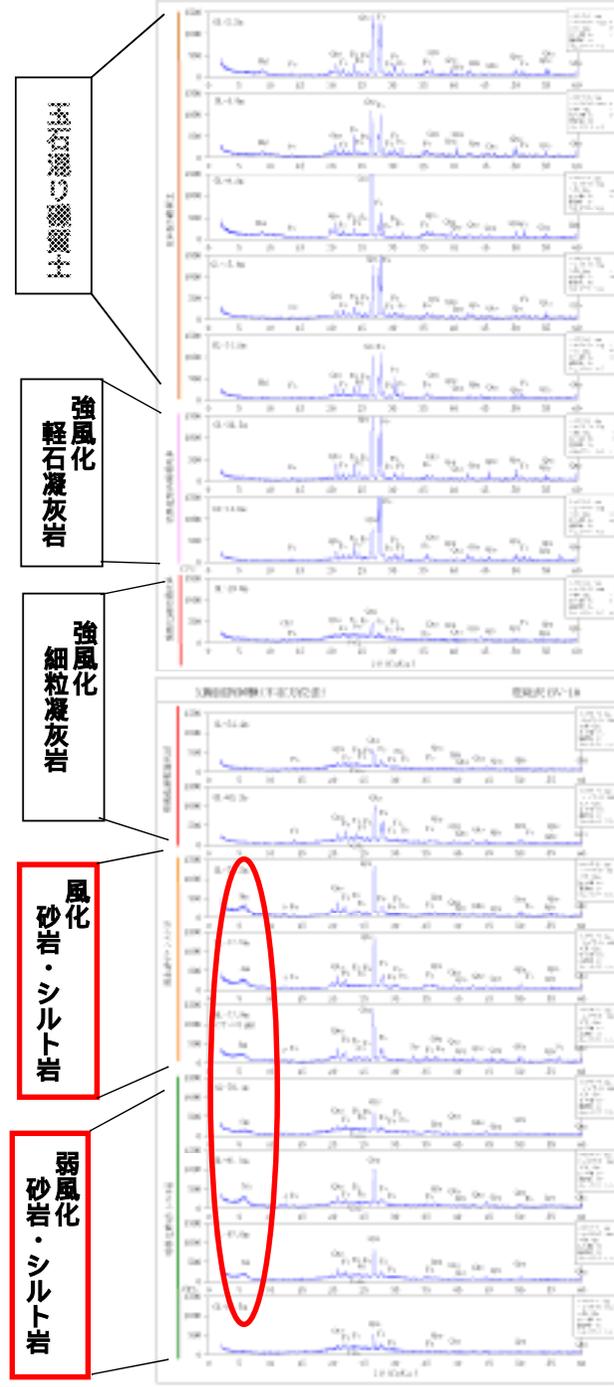
調査孔 No.	孔口標高 (m)	すべり面 (移動土塊底面)				調査孔 No.	孔口標高 (m)	すべり面 (移動土塊底面)						
		深度 (GL-m)	標高 (m)	近影写真	対応地質			特徴	考察	深度 (GL-m)	標高 (m)	近影写真	対応地質	特徴
BV-1	298.96	26.90	272.06		上位: 礫混じり土 多様な礫、植物片が乱雑に入り交じる。 下位: 礫混じり土 腐植物を含む旧表土	非常に軟質で粘性強く、腐植物を含む旧表土と礫混じり土の層界。上位の礫混じり土は、GL-22.10～26.90m間に分布しており、最大径5cmの礫とシルト・細粒砂の基質で構成される。礫は安山岩や溶結凝灰岩など、礫形は円礫・角礫と多様であり、粒径の海汰は悪い。また基質は含水著しく軟質であり、木片や植物根が雑多に混在している。	礫混じり土上位には比較的攪乱の乏しい強風化岩が覆っている。礫混じり土の下位には旧表土が分布。礫混じり土には多様な礫や植物片等が雑多に含まれ、基質はルーズで含水著しい。 以上の特徴により、礫混じり土層は地すべり移動土塊の底面と判断される。	BV-13	362.60	96.15	266.45		強風化軽石凝灰岩・弱風化砂岩シルト岩層界	GL-96.15mに明瞭な擦痕を伴うせん断面が見られる。せん断面は粘土化著しく、光沢を示す亜円礫状未風化部が見られる。GL-96.15mのせん断面は新鮮・硬質な砂岩シルト岩となる。 以上より、GL-96.15mをすべり面と判断する。
BV-2	317.79	38.30	279.49		礫混じり土 表面が円磨され光沢を示す礫を多数含む。	最大径7cmの礫と粘土・中粒砂の基質で構成される礫混じり土。GL-36.40～38.30m間に分布し、層厚はわずかに190m。丸みを帯び、表面に光沢を示す礫が多数含まれている。基質は非常に粘性強く、含水著しい。	礫混じり土の上位には、攪乱乏しい強風化軽石凝灰岩が覆る。礫混じり土の下位には、硬質で棒状に採取される弱風化凝灰岩が連続し、不動岩盤と判断される。 以上より、礫混じり土層は地すべり移動土塊の底面と判断される。	BV-16	344.32	79.20	265.12		強風化砂岩シルト岩底面	GL-69.00～70.60m区間はせん断面が密に網目状に発達し、一部に鈍い光沢が見られる。GL-74.80mに鈍い光沢を示すせん断面が見られる。せん断面の傾斜は10°。弱い擦痕が見られるが、方向が一定していない。従属せん断面か？ 74.20～79.20m区間は粘土化著しく、未風化硬質部が棒状に混入、礫は丸みを帯び、表面は光沢を示す。 GL-79.20mに深は新鮮で硬質。 以上より、GL-79.20mをすべり面と判断する。
BV-4	281.45	27.40	254.05		強風化砂岩シルト岩底面	風化・破砕著しい強風化シルト岩の底面付近では、せん断面が密に網目状に発達する様子が確認される。また弱風化硬質部が亜円礫状に含まれる。明瞭な鏡肌は見られませんが、部分的に鈍い光沢が認められる。	強風化シルト岩は風化破砕が進行し、粘土化・含水著しい。また一部に堆積構造が認められ、その傾斜角度は34°と急傾斜を示す。強風化シルト岩の下位に分布する礫混じり土には植物片が乱雑に混在することはない。光沢を示す礫は見られないため、ダム湖底堆積物と考えられる。 以上より、強風化シルト岩底面は地すべり移動土塊の底面と判断される。	BV-17	346.84	75.60	271.24		強風化砂岩シルト岩内	GL-75.60mに見られるせん断面は、傾斜角度4°。鏡肌と擦痕は明瞭で、擦痕方向は面の最大傾斜方向に一致する。 GL-75.80～76.00m区間は破砕により棒状コアとなるが、岩質は硬質。 以上より、GL-75.60mをすべり面と判断する。
BV-9	308.15	29.10	279.05		強風化軽石凝灰岩底面	風化・破砕著しく、礫混じり砂質土状となった軽石凝灰岩の底面付近に粘板岩の亜円礫 (写真中央) や珪質泥岩の角礫が含まれる。	著しく乱された軽石凝灰岩の底面に異質な礫が含まれる。軽石凝灰岩中には粘板岩や珪質泥岩は含まれない。この深度のみ、旧地表の礫を巻き込んだ可能性大。 以上より、地すべり移動土塊の底面と判断される。	BV-20	348.64	81.75	266.89		風化砂岩シルト岩内	GL-81.75m前後に傾斜角5～6°のせん断面が9枚確認される。それらに鈍い光沢を示すものの、擦痕粘土化は認められない。 以上より、GL-81.75mをすべり面と判断する。
BV-9	308.15	46.00	262.15		強風化砂岩シルト岩底面	風化・破砕著しい強風化シルト岩と現位置風化と思われる強風化細粒凝灰岩の境界面が見られる。	風化・破砕が進行し、攪乱著しい砂岩シルト岩。岩組織が一部に残っており、せん断面や円礫状未風化硬質部が見られる。 下位の細粒凝灰岩は上面付近は増鉄細方突著しく粘土化しているが、攪乱されていない。また強風化部から弱風化部への変化は漸移的であり、現位置岩盤と考えられる。 以上より、強風化シルト岩底面は地すべり移動土塊の底面と判断される。	BV-22	286.93	25.20	261.73		強風化細粒凝灰岩上面	GL-25.00～25.20m区間は、乱れた強風化細粒凝灰岩と砂礫が混在している。含まれる礫の表面は光沢を示す。 下位で再び細粒凝灰岩と砂岩シルト岩が分布する。 以上より、強風化細粒凝灰岩上面は地すべり移動土塊の底面と判断される。
BV-10	348.32	77.90	270.42		風化砂岩シルト岩底面	GL-77.40～77.90m区間はせん断面が密に網目状に発達しており、中でもGL-77.80mには明瞭な擦痕を伴うせん断面が見られ、GL-77.90mには明瞭な鏡肌を伴うせん断面が見られる。 GL-77.80mのせん断面 擦痕明瞭、傾斜角度4°。擦痕方向は最大傾斜方向に対して反時計回りに約20°斜交する。 GL-77.90mのせん断面 傾斜角5°のせん断面が複数密集。鏡肌明瞭。	岩質は比較的硬質で粘土化に乏しいが、破砕の著しい砂岩シルト岩層。 各所に葉理構造が認められるものの、その傾斜角度は4～50°とバラツキが激しく、規則性が無い。 GL-77.80mには明瞭な擦痕。 GL-77.90mには明瞭な鏡肌。 以上より、風化砂岩シルト岩底面をすべり面と判断する。	BV-22	286.93	40.10	246.83		礫混じり土	径5～10mmの亜円・円礫を多く含む。礫種は多種多様。 以上より、礫混じり土層は地すべり移動土塊の底面と判断される。
BV-12	353.06	84.10	268.96		強風化砂岩シルト岩内	GL-84.10mで部分的にせん断面の密集部が見られ、その一部に鈍い光沢が見られる。	GL-79.40～80.00m区間は未風化硬質部が棒状に認められ、それらの表面に光沢が見られる。 GL-79.60mには弱い擦痕を伴うせん断面が認められるが、その傾斜角度は35°と急角度である。 GL-84.10mに深ははや軟質だが岩構造に乱れは見られない。 以上より、GL-84.10mをすべり面と判断する。	BV-23	322.22	57.30	264.92		礫混じり土	最大径5cmの礫とシルト・粗粒砂で構成される。 礫種は溶結凝灰岩や凝灰岩の円礫など多種多様で、表面が酸化したのも見られる。 強風化砂岩・シルト岩がブロック状に混在する。 礫混じり土底面は含水著しく (非常にルーズ)。 GL-56.60～57.30m含水著しく、空隙多 (非常にルーズ)。 以上より、礫混じり土層は地すべり移動土塊の底面と判断される。

ボーリングコアにより、すべり面はせん断面として確認されている。

調査孔別 X線回折結果



BV-10 深度別 X線回折結果

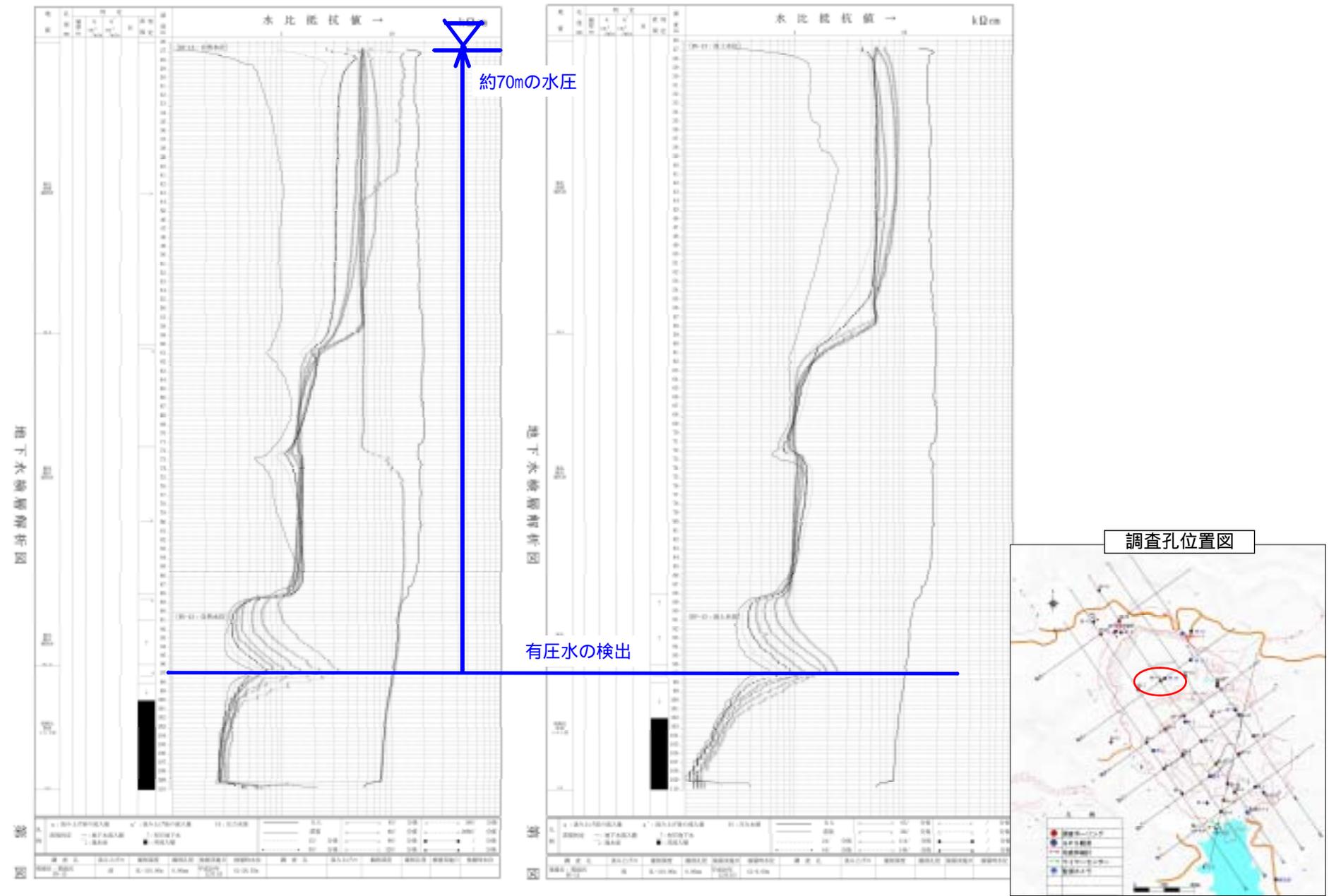


砂岩・シルト岩層で
スメクタイトを検出



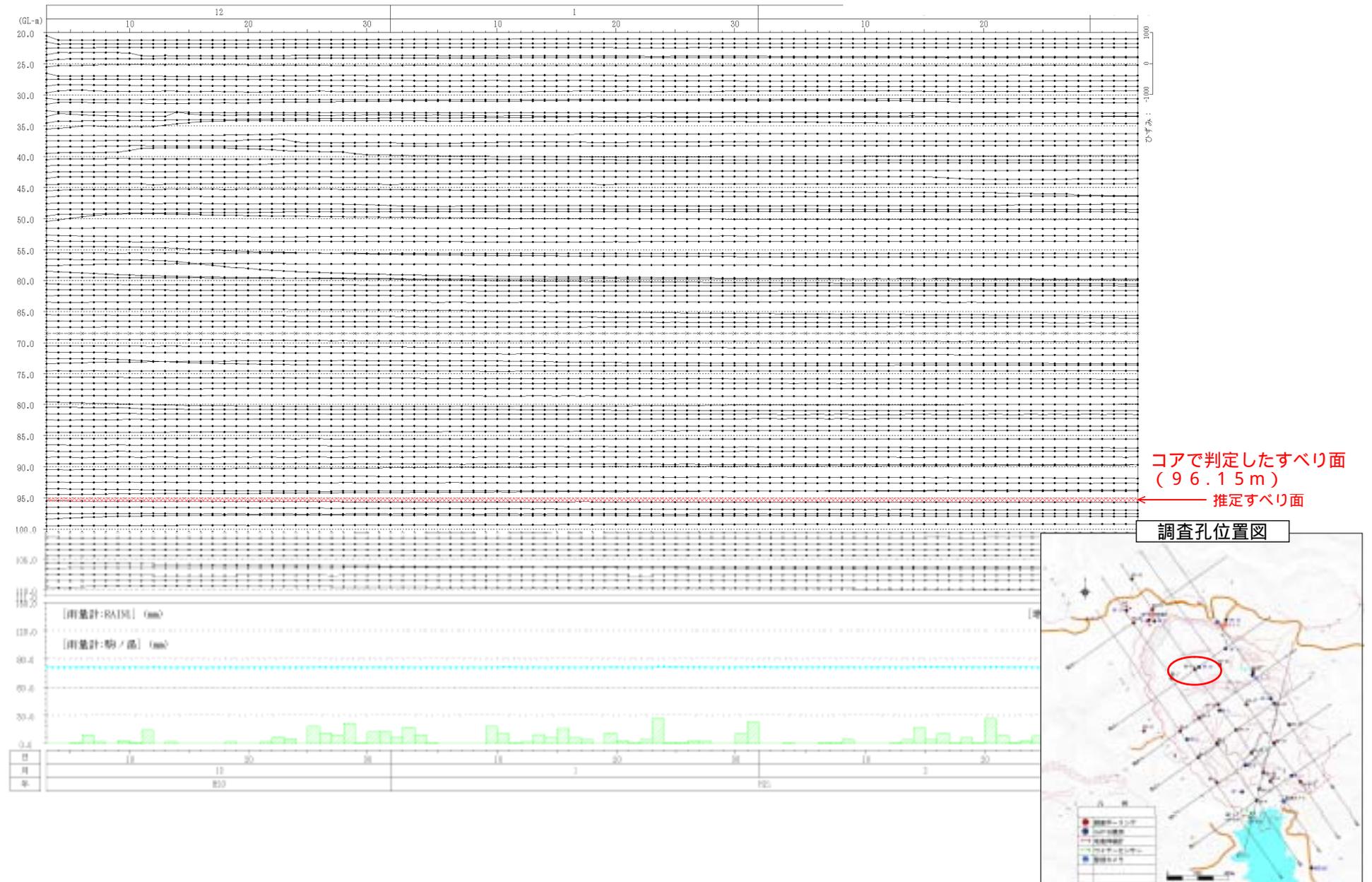
同層準内で弱線を
形成しやすい

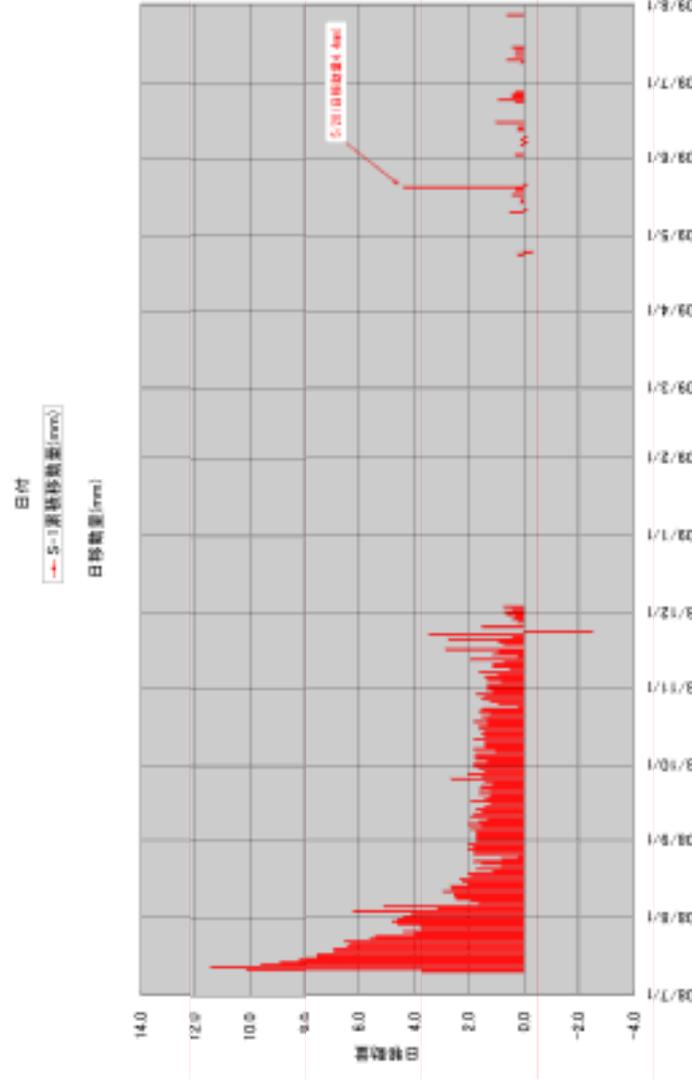
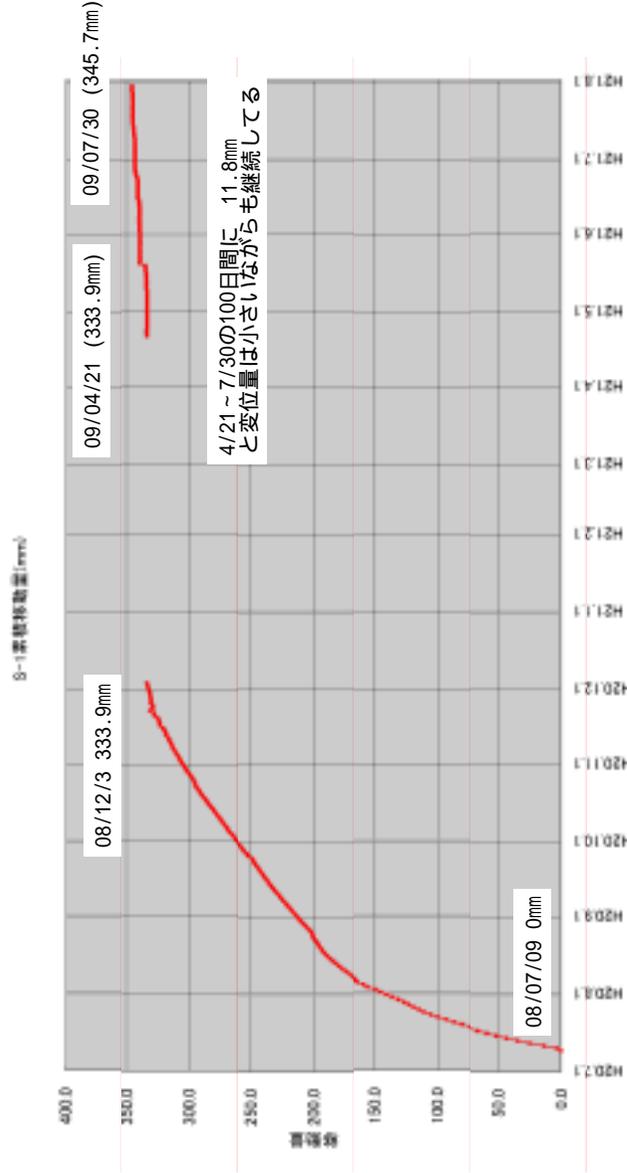
BV-13 地下水検層図



BV-13歪・水位変動図

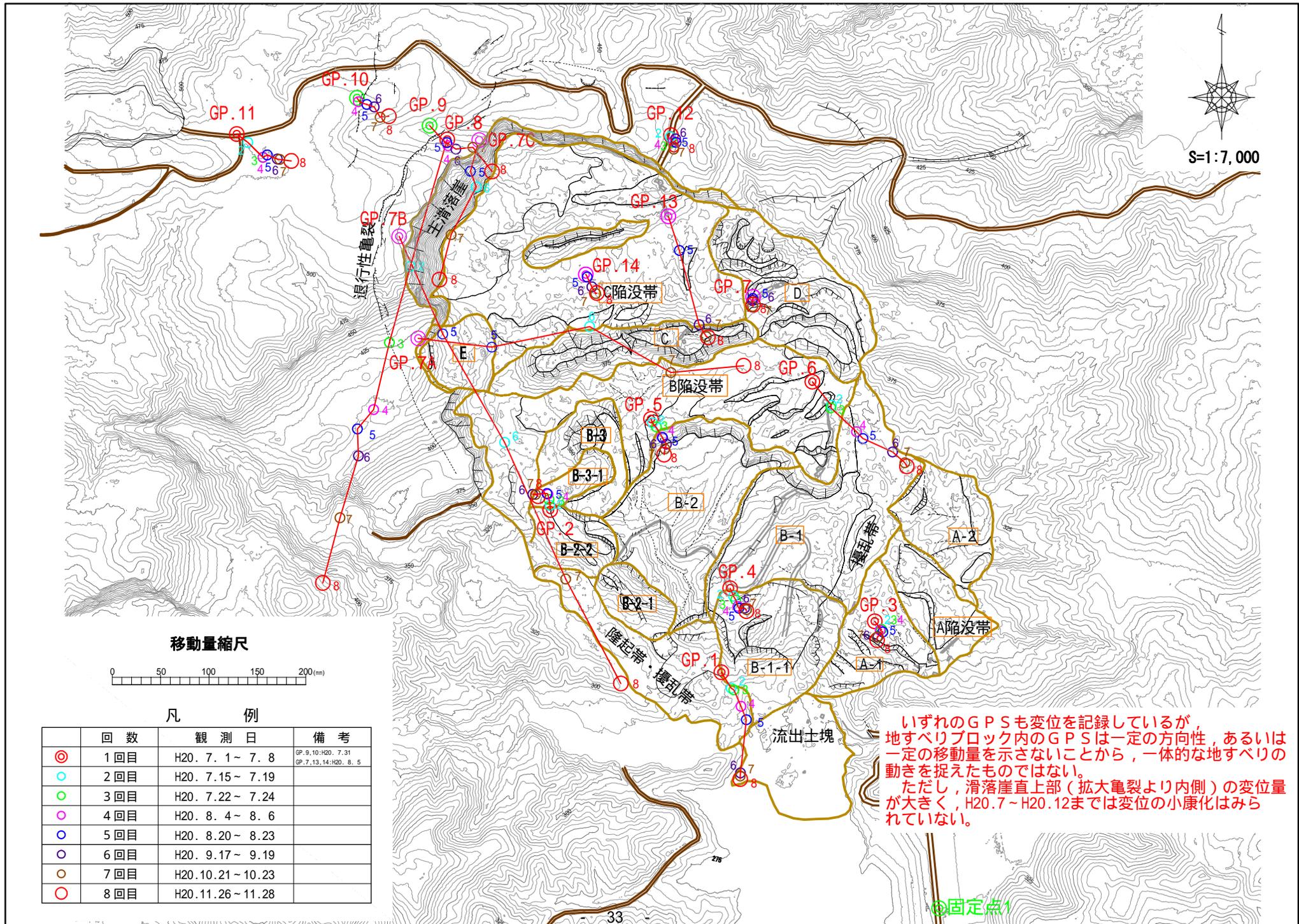
地すべりによる変位があれば、ひずみ計が累積 (+ / -) するが、BV-13では累積変位はみられないため、この孔では観測期間中に地すべり発生していない判断される。



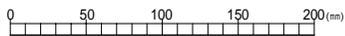


伸縮計は拡大亀裂の変位を計測している。
 亀裂が開いていけば変位量は大きく記録される。
 拡大亀裂の変位は滑落崖の不安定な状態を表す指標となる。
 観測結果では変位量は小さくなりつつあるが、変位は停止しておらず、
 拡大亀裂より下方は不安定である。

伸縮計は拡大亀裂の変位を計測している。
 亀裂が開いていけば変位量が大きくなる。
 拡大亀裂の変位は滑落崖の不安定な状態を表す指標となる。



移動量縮尺



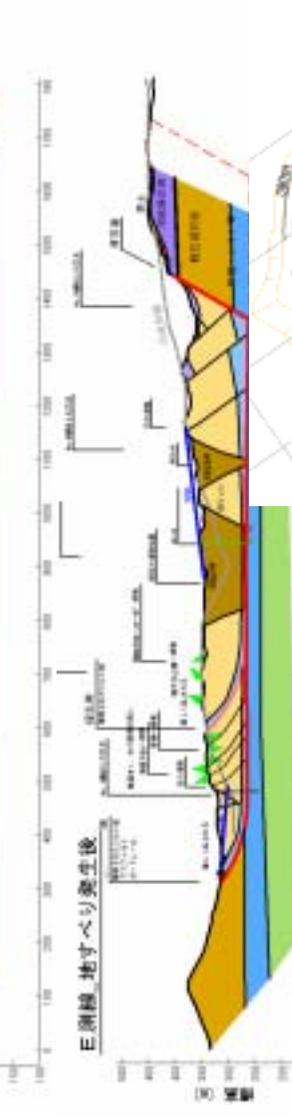
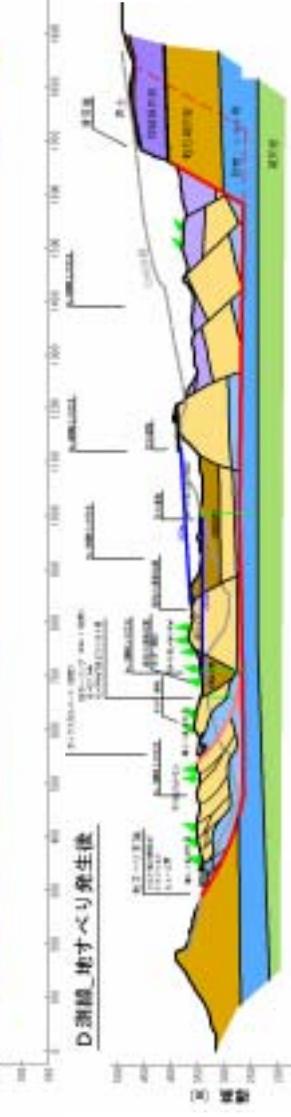
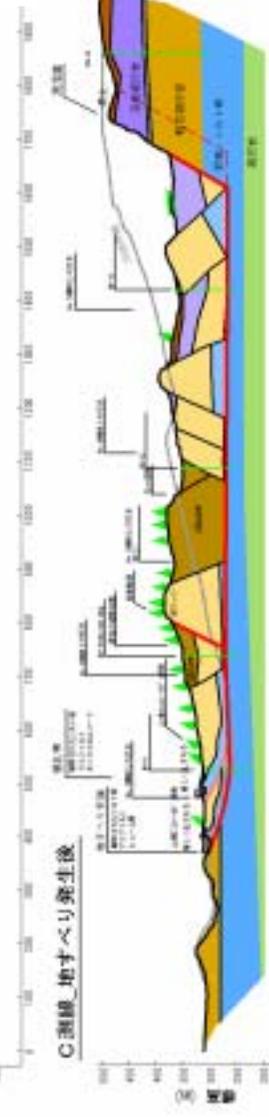
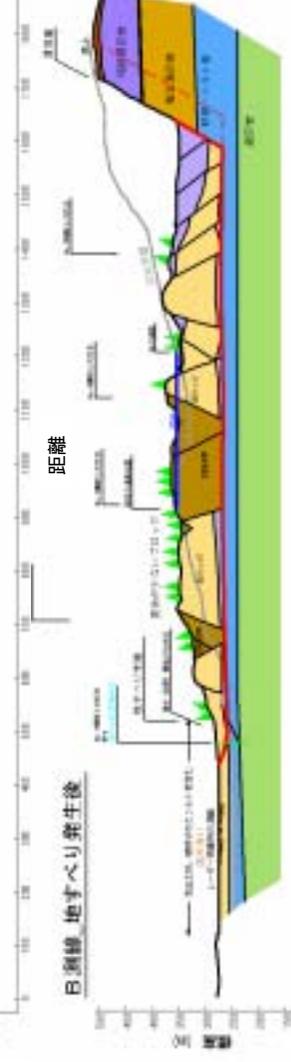
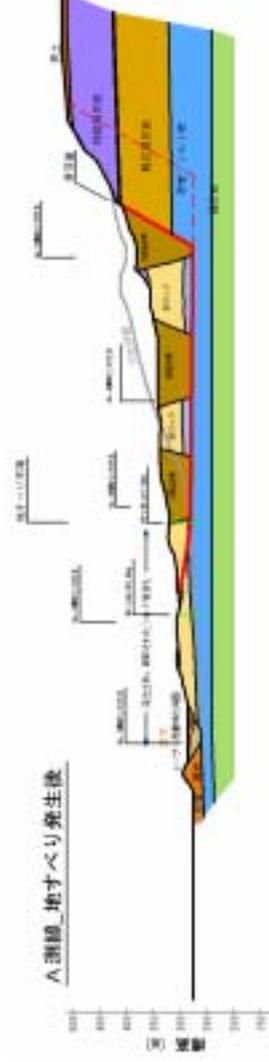
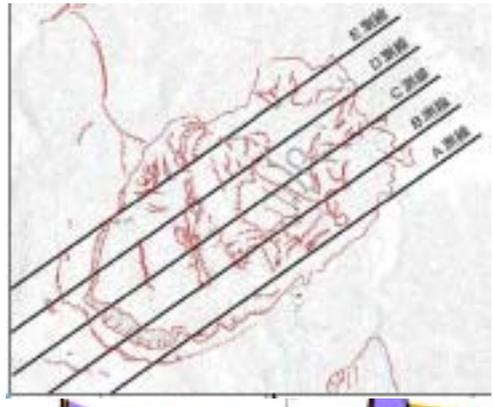
凡 例

	回数	観測日	備考
◎	1回目	H20. 7. 1 ~ 7. 8	GP. 9, 10; H20. 7. 31 GP. 7, 13, 14; H20. 8. 5
○	2回目	H20. 7. 15 ~ 7. 19	
○	3回目	H20. 7. 22 ~ 7. 24	
○	4回目	H20. 8. 4 ~ 8. 6	
○	5回目	H20. 8. 20 ~ 8. 23	
○	6回目	H20. 9. 17 ~ 9. 19	
○	7回目	H20. 10. 21 ~ 10. 23	
○	8回目	H20. 11. 26 ~ 11. 28	

いずれのGPSも変位を記録しているが、地すべりブロック内のGPSは一定の方向性、あるいは一定の移動量を示さないことから、一体的な地すべりの動きを捉えたものではない。ただし、滑落崖直上部（拡大亀裂より内側）の変位量が大きく、H20.7~H20.12までは変位の小康化はみられていない。

◎固定点1

2.14 地すべり断面図とすべり面等高線図



凡例

1.1	既設建築物等	地すべり箇所と地すべり面との境界を示す。地すべり箇所は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.2	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.3	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.4	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.5	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.6	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。
1.7	地すべり面	地すべり面を示す。地すべり面は、地すべり面と地すべり面との境界を示す。

3. 地すべり全体ブロックの危険度の判定 3.1 地震応答解析結果

<3d-FEM:地震応答解析>

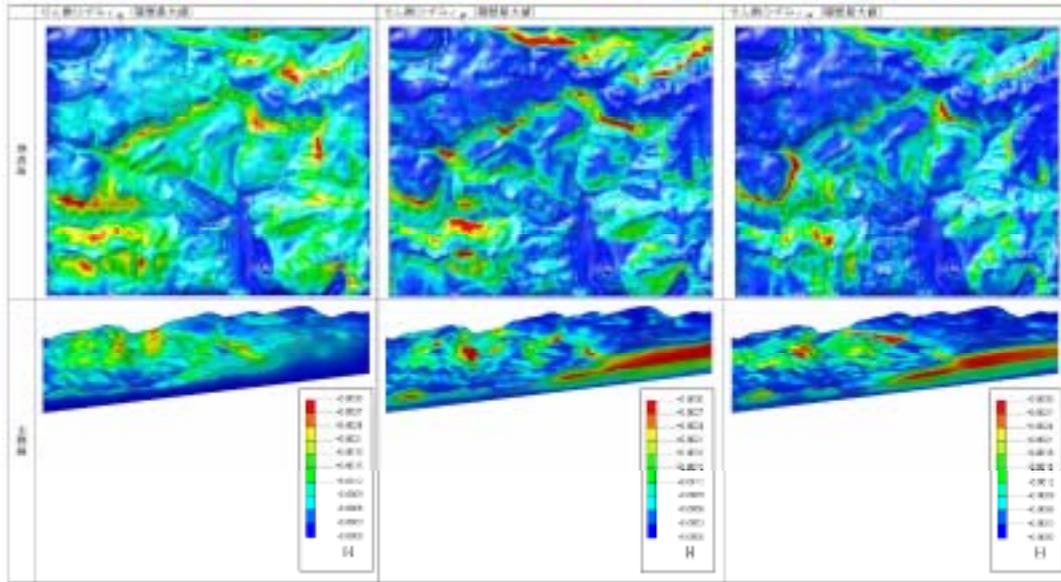


図.1 崩壊前地形のせん断ひずみ

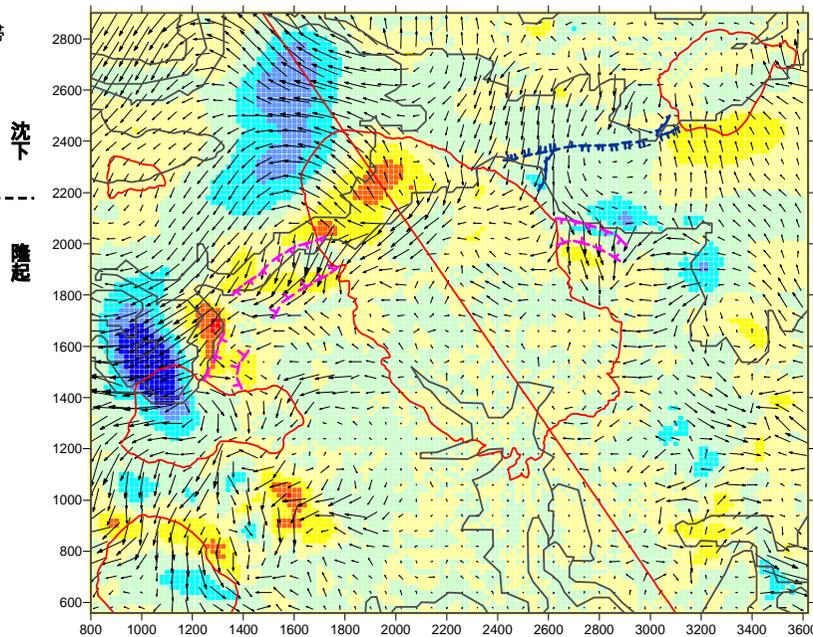
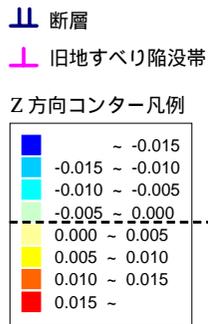


図.2 FEM解析による残留変位

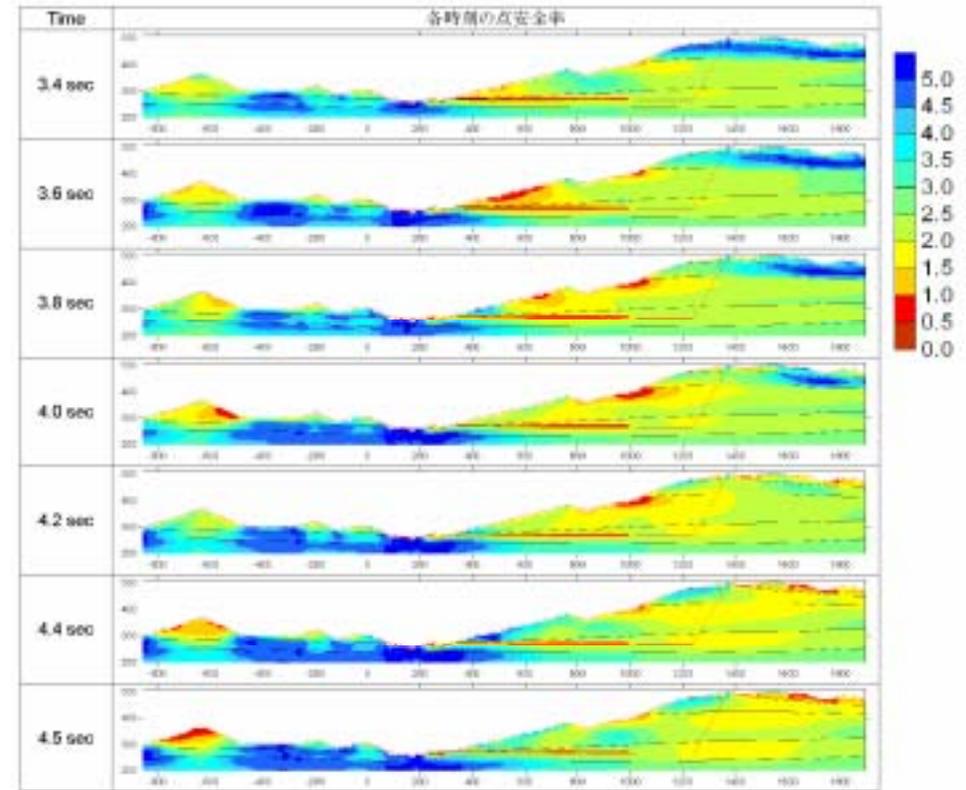


図.3 滑動前地形の各時刻、及び履歴最小点安全率

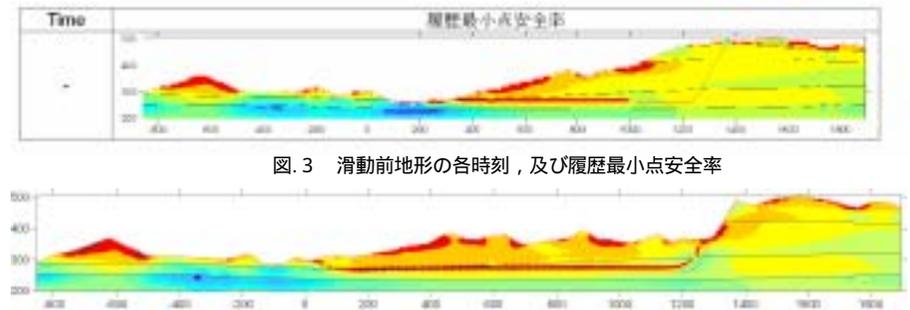


図.4 滑動後の地形における履歴最小点安全率

- (1) 地すべり滑動前地形による検討
せん断応力、せん断ひずみ、残留変位 キャップロック構造に強く支配される
点安全率の検討により、荒砥沢地すべりは、「旧滑落崖から下方が先に滑動し、上流側が追いつけるように滑動した」と推定される。
- (2) 地すべり滑動後地形による検討
既に形成されたすべり面は、今回と同様の地震時には弱線となる。

< DDA : 不連続変形解析結果 >

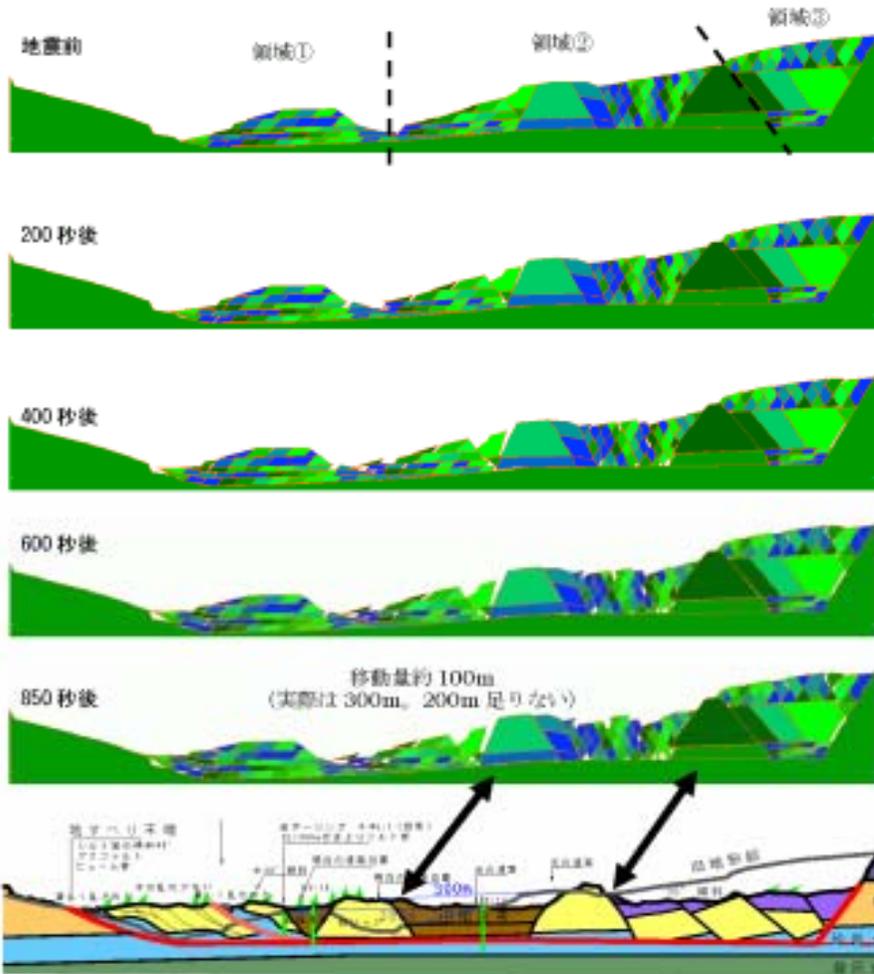


図.1 せん断抵抗角5°の場合の再現結果 移動量100m (300mに達しない)

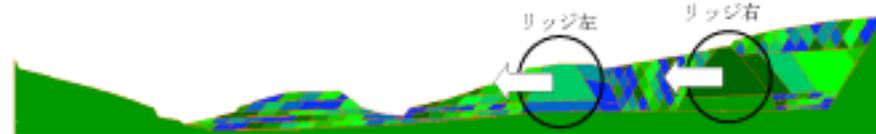


図.2 強制活動力の付加

	リッジ面積 m ²	単位質量 t/m ³	付加した 物体力 m/s ²	活動力 kN/m
リッジ左	11,600	1.7	10	197,000
リッジ右	16,600	1.7	5	141,000
計				338,000

すべり面長 : 800m
 水の重量 : 10kN/m³
 $338,000 \text{ (kN/m)} \div 800 \div 10 = 4.2 \text{ mの水压相当}$

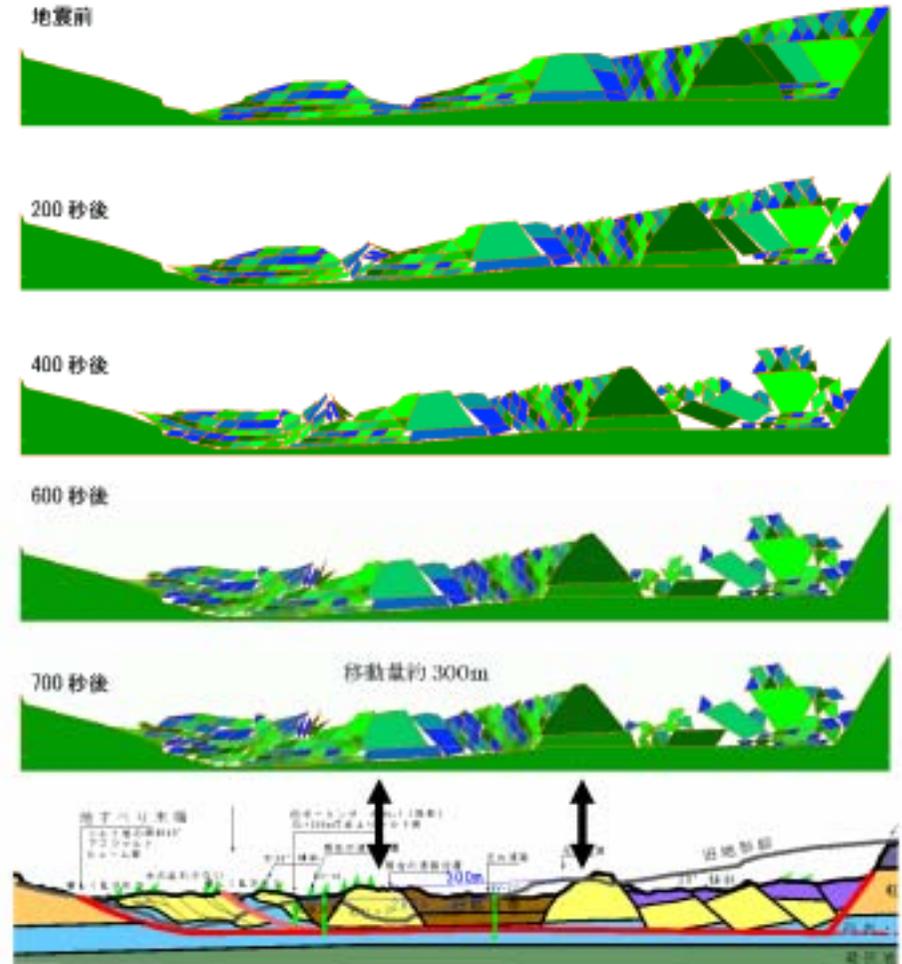


図.3 せん断抵抗角5° + 強制活動力付加の場合の再現結果 300mの移動量を再現

< 間隙水圧とせん断抵抗角（みかけのせん断抵抗角） >

3.3 間隙水圧とせん断抵抗角

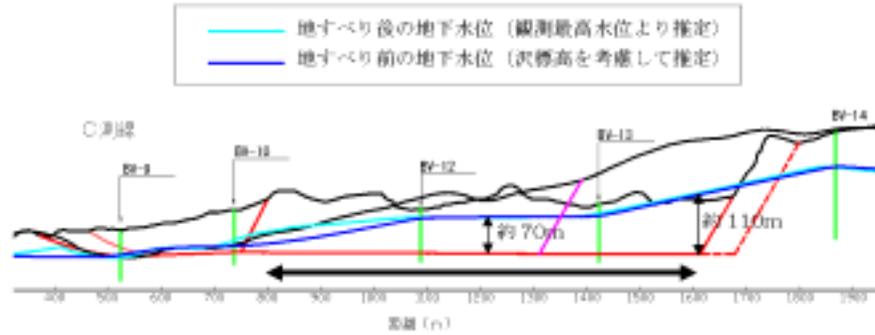


図 地下水分布図（C測線の推定水位）

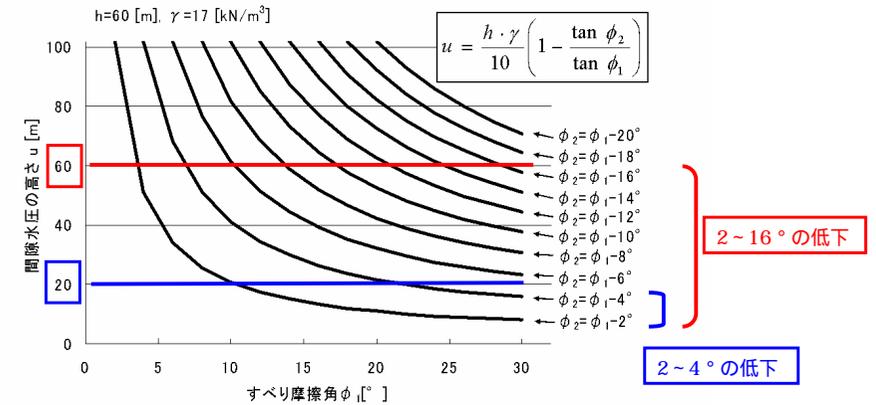


図. せん断抵抗角（ ϕ_1 , ϕ_2 ）とuの関係

< BV-10 すべり面一面せん断試験結果 >

$r = 10^\circ$ （残留強度対応） 間隙水圧を考慮すると？

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{すべり摩擦角 } \phi_1 \\ \text{間隙水圧 } u \end{array} \right\} \leftrightarrow \phi_2$$

$$(W - u l) \tan \phi_1 = W \tan \phi_2$$

W : スライス重量 (kN/m)

u : 間隙水圧 (kN/m²)

ϕ_1 : u の影響を含まないせん断抵抗角 (°)

ϕ_2 : u の影響を含むせん断抵抗角 (°)

すべり面がほぼ水平なため, $\cos \theta = 1$ とした

$$W = h \cdot l \cdot \gamma$$

h : 移動層の層厚 (m)

γ : 移動層の単位体積重量 (kN/m³)

$$u = h \cdot \gamma \left(1 - \frac{\tan \phi_2}{\tan \phi_1} \right) \quad [\text{kN/m}^2]$$

< DDA 解析のまとめ >

せん断抵抗角 5° , 間隙水圧考慮なしの場合の移動距離は 100m と 300m に満たない。

せん断抵抗角 5° 間隙水圧 42m に相当する強制活動力を付加した場合に, 300m の移動を再現できた。ブロック内での観測水位を基にした地すべり発生前の中腹から上部にかけて, 70~110m もの水圧を有している。

安定解析を基にせん断抵抗角と間隙水圧の相互換算式を作成し, 70~110m の水圧をせん断抵抗角の低減に反映させると, 水圧の影響を加味したみかけせん断抵抗角は地すべり頭部ではほぼゼロに等しいと判断された。

地すべり滑动前は, せん断抵抗角は残留強度である 10° 以上のせん断強度を有していたと思われるが, 滑动開始後はほどなく残留強度 (10°) に低下して, これに間隙水圧が加わり, みかけのせん断抵抗角は 5° 以下まで落ちたと考えられる。

上記の結果は, ほぼ水平に近いすべり面傾斜角からいっても妥当と考えられ, 荒砥沢地すべりの滑动時の中腹から頭部にかけてのせん断抵抗角 $0 \sim 3^\circ$ と非常に小さな値であったと考えられる。

ここで記載したせん断抵抗角は, 地すべり活動中の動的なせん断抵抗角であり, 地すべり安定解析で用いる静的なせん断抵抗角とは区別しなければならない。

3.4 近似三次元解析結果

<近似三次元安定解析（簡易ヤンプ法）>

<条件>

すべり面の土質試験結果 ($\phi' = 10^\circ$, $c' = 0$) を用いた検討と、現象を説明できるせん断強度定数の検討を実施。

荒砥沢ダムで確認された地震波形データから計算される水平震度 (k_h 値) を用いて、地震力を考慮した検討を実施。

地震応答解析の点安全率による検討での考察、「荒砥沢地すべりは旧滑落崖から下方が先に滑動し、足元が不安定となった上部斜面が後追いつくように滑動した」より、滑動時の c'/ϕ' の検討には旧落崖ブロックを用いる。

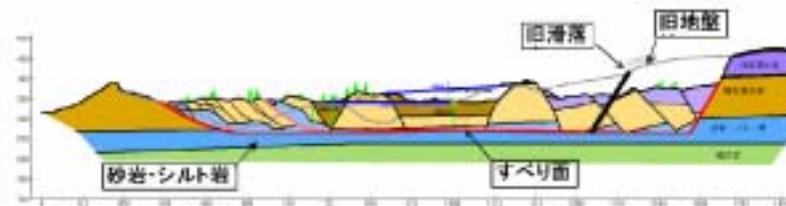


図.1 地すべり発生前後の地形

全体ブロックは1ブロックで滑動しにくい? (定性的な根拠)

すべり面傾斜は極めて低角度 (下方: $0 \sim 2^\circ$, 上方: マイナス勾配)

すべり面の一面せん断試験結果は, $\phi' = 10^\circ / c' = 0 \text{ kN/m}^2$

移動体のサンドイッチ状構造 (リッジ (ブロック状岩体), 陥没帯 (破碎ゾーン))

移動体の物性が異なり, 外力が一様に伝播せずに消散する。

地形	発生前		発生後			
	100%	100%	50%	25%	12.5%	
軽石凝灰岩の剛性	100%	100%	50%	25%	12.5%	
ケース	#0	#1	#2	#3	#4	
正值最大 (山側への揺れ)	0.248	0.208	0.145	0.113	0.069	
負値最大 (ダム湖側への揺れ)	-0.241	-0.231	-0.186	-0.140	-0.109	

地形	解析断面名	安定解析式	解析水位	逆算時の安全率	ϕ'	c'
1					20.0	57.0
2					21.0	42.2
3	旧落崖ブロック	簡易ヤンプ法	況基準	F=0.98	22.0	27.2
4	(k _h =0.241)	5断面	断面		23.0	12.0
5					23.1	10.0
6					23.5	5.0
7					23.8	0.0

	旧滑落崖ブロックでの逆算		地震後現断面		
	ϕ'	c'	水平震度 K_h	安全率 F	
10	20.0	57.0		-	
21	21.0	42.2	剛性低減0	0.231	1.004
22			50%	0.186	1.202
23			25%	0.140	1.503
24			12.50%	0.109	1.810
31	22.0	27.2	剛性低減0	0.231	1.005
32			50%	0.186	1.203
33			25%	0.140	1.505
34			12.50%	0.109	1.811
40	23.0	12.0	剛性低減0	0.231	1.006
41			50%	0.186	1.204
42			25%	0.140	1.506
43			12.50%	0.109	1.813
50	23.1	10.0	剛性低減0	0.231	1.007
51			50%	0.186	1.204
52			25%	0.140	1.506
53			12.50%	0.109	1.813
60	23.5	5.0			-
70	23.8	0.0			-

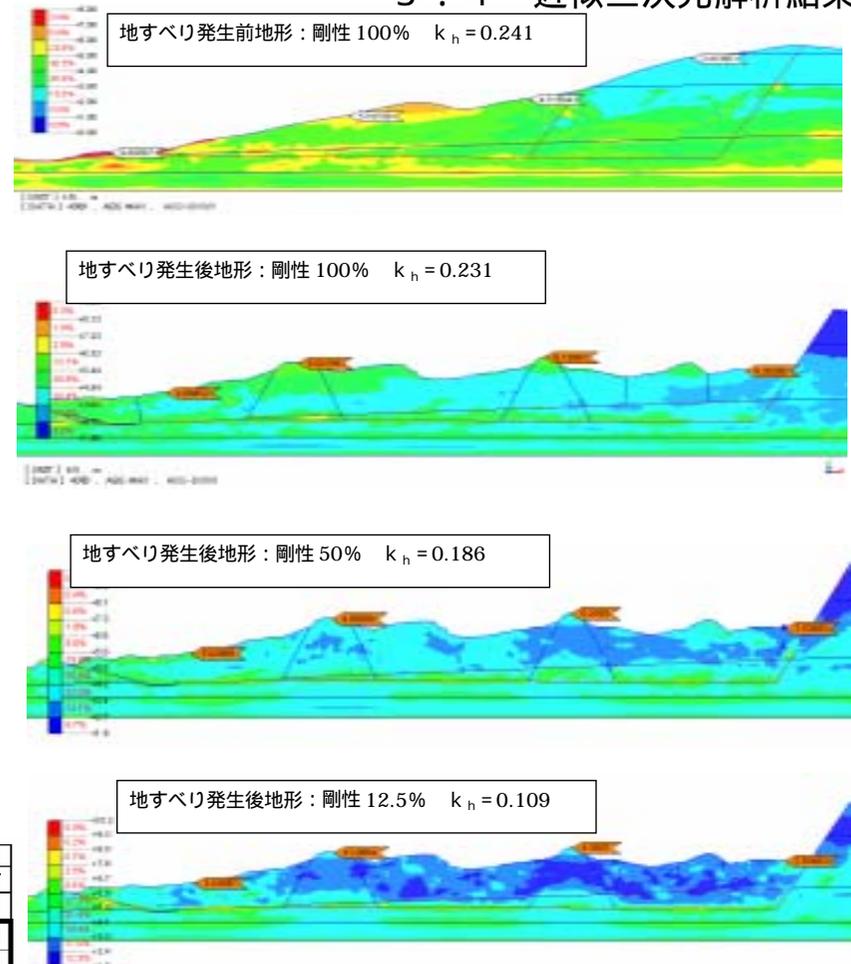


図.2 移動体の剛性の変化にともなう履歴最大加速度分布の変化

<近似三次元安定解析結果>

$c' = 0 / \phi' = 10^\circ$ の場合, $F_s = 1.034$, $K_h = 0.01$ (10gal 相当) で $F = 0.955$ と実態を説明できない。

抵抗力を過小に評価している。見かけの抵抗力はもっと大きい。

旧滑落崖ブロックで, $K_h = 0.241$ 時に $F = 0.98$ として, c'/ϕ' の逆算を実施 ($c' > 0$ $\phi' < 23.8^\circ / c' < 50 \text{ kN/m}^2$ として)

移動量が 300m にも達しており, 移動体の剛性は低減していることが予想され, 4段階に分けた状態をの水平深度を渡辺・馬場の方式から求め, 安定解析に付加した。

全体ブロックの安全率は, $F = 1.004 \sim 1.813$ (移動体の剛性により変化するが, $K_h = 0.231$ (剛性の低減を見込まない状態) に対して, 安全率は 1 を上回る。

今回と同程度の地震に対して, 全体ブロックが一体として滑動する可能性は小さく, 全体ブロックに対する地すべり対策の必要性が低いと判断される。ただし, 他に類をみない地すべり災害であり, 異なる手法でも安定性に関して検証する必要がある。

岩手・宮城内陸地震に係る山地災害対策の課題と方針

地区名	荒砥沢地すべり
山腹荒廃	「二迫川上流」で記載
溪流荒廃 (河道閉塞)	「二迫川上流」で記載
荒廃現況 地すべり	規模：地すべりは、幅約900m、斜面長約1,300mの規模である。地すべり発生前後の土砂収支の検討及び踏査結果から、すべり面傾斜角は1～2°で、移動土塊量は約67百万m ³ に達する。
	変形構造：地すべりの移動体内には、二つのリッジ(尾根)が形成され、リッジの上下流側には三つの大規模陥没帯が形成されている。中腹から下方の移動体は比較的土塊の変形が小さいが、下半部は隆起帯となっており、この隆起帯に二筋の擾乱帯がみられる。また、右側壁下半部に圧縮擾乱帯が生じ、これに沿って小ブロックが連続し、擾乱帯に挟まれダム湖に開いた箇所から崩壊土砂が流出している。6月15日以降に冠頭部北西側に退行性亀裂が発生・拡大している。
	移動方向：地すべり地内の道路・林相位置を地すべり発生前後で比較した結果、移動方向はNW～SEで現在の測線方向に一致する。移動量はB～Dブロックで約300m、Aブロックで約200～100mである。B～Dブロックは水平～やや沈下、Bブロック末端とAブロックは大きく隆起した。冠頭部拡大ブロックは南への移動量が多い。
	発生前後の状況：地すべりは旧地すべり(3ブロック)にまたがって発生している。Bブロックは、中央と西側の旧地すべりの陥没帯下流土塊に相当し、Cブロックは旧地すべりの冠頭部土塊に相当し、Aブロックは南東側旧地すべりの下半部に相当する。中央と南東側旧地すべりの移動方向は大きく異なる。隆起帯は、いずれも上流側土塊が対岸に乗り上げた位置にあたる。
	ボーリング結果：BV-4及びBV-9(46.0m)は旧ダム湖上に位置しており、移動土塊が堆積した状況である。BV-10(77.9m)、BV-12(84.1m)、BV-16(79.2m)、BV-17(75.6m)、BV-20(81.75m)では、風化砂岩シルト岩互層内でせん断面、あるいは擦痕が確認されているが、BV-13(96.15m)は、風化砂岩シルト岩上面にあたる。風化砂岩シルト岩層内及び上面に形成しているすべり面では、X線回折でスメクタイトが検出されている。
	地質：下位より小野松沢層の砂岩・シルト岩/軽石質凝灰岩/溶結凝灰岩が累層する。地層構造は極めて緩い流れ盤である。
	すべり面の縦断面形状：すべり面は、小野松沢層の砂岩・シルト岩の層面に沿う層面すべりである。ダム湖付近では、隆起現象がみられないことから、すべり面は旧河床付近で標高250m付近に流れ盤状に達すると推測される。下部～中腹上部にかけては、1°程度の低角度で、上部(BV-12～BV-13)では-0.4°程度と緩い逆傾斜を形成しており、極めて滑りにくい断面形状である。この構造は砂岩・シルト岩の三次元構造と同調的である。
	GPS観測結果：8月上旬頃から日変位量が小さくなり、移動方向がバラツキはじめ、10月から11月の1日当たりの水平変動量は、滑落崖で1.37～3.46mm/日(7～8月：5～11mm/日)、移動体内で-0.04～0.11mm/日(7～8月：0.2～3.9mm/日)と小さくなっている。
すべり面の変位観測結果：地表部では変位がみられないのに対して、ボーリング孔内に設置したパイプ歪計、及び孔内傾斜計では明確な地すべり変動は観測されていない。	
地表水：滑落崖からの湧水により、陥没帯の西側から右側壁側にかけて湛水が発生しており、これに端を発する流水がルーズな移動土塊を浸食している。また、末端部、地すべり地内の移動土塊地表部及び側壁部においても湛水が発生しており、特に末端部の湛水は湛水面積が徐々に拡大している。	

4.1 荒砥沢地すべり対策の基本的な考え方(2/2)

<p>課 題</p>	<p>観測期間内においては、GPS観測により地表面の変位は確認されるが、すべり面の変位は観測されておらず、全体すべり、拡大すべりといったブロックが一体として滑動はしていないと推測される。しかしながら、湧水や地表水の流入によって、特に融雪期は地下水が高まり地すべりが再発する可能性はないか。</p> <p>冠頭部滑落崖の上方斜面には発生した亀裂が、現在も変位(12月1～3日現在、0.6mm/日)を継続している。滑落崖の落差は約15.0mに達しており、この変位が更に拡大して冠頭部滑落崖が拡大崩壊した場合、移動体への頭部載荷や衝撃力により、地すべり滑動の誘発が懸念されるため、大規模な排土工を計画している。しかし、その後の対策の実施に当たって、地すべり滑動の監視、対策工施工中の安全確保のため、地すべり全域、周辺、小ブロックの監視体制が必要ではないか。</p> <p>地すべりの下流域に荒砥沢ダムが位置しており、地すべり地内及び縁辺部の地表水がすべてダム湖に流入する。このため、ダム湖への土砂や濁水の流入に対する配慮の必要はないか。</p> <p>対策工の工事区域は分散するが、地すべり地内周辺域で工事車両の通行などが重複するため、各工事の十分な調整が必要ではないか。</p> <p>本地すべりは地震に起因した地すべり災害であり、その被害、規模、滑動形態、発生機構等に大きな特徴を有する。この特徴を表した地形・地質等の一部を保存し、この災害を後世に語り継ぐような工夫ができないか。</p>
<p>対策方針 (基本的な考え方)</p>	<p>移動体内の湛水解消対策、滑落崖の安定化対策、末端ブロックの地すべり対策を実施する計画とする。</p> <p>(1) 当面の対策</p> <p>1) 排水対策</p> <p>末端部東側において移動土塊が沢を閉塞しており、徐々に湛水面積が拡大しており、対策が急がれる。旧溪床と現地表面の比高が5.0m以上に達し、水路による導水が困難なことから、ライナープレートを用いた縦坑を足場とした暗渠工により排水を確保する。</p> <p>ブロック上部の湛水(頭部陥没帯、第一リッジ西側)と中腹部の湛水(第二リッジ南西、第二リッジ南、右側壁)については、水路工で排水する。</p> <p>地すべり右側壁に沿ったヒアヒクラ沢については、堰止め状態の解消とともに、流路を固定して右側壁部の侵食を防止する流路工を施工する。</p> <p>上流部で発生した地すべりにより土砂が流入し、溪床勾配が緩く溪床幅が拡大したシツミクラ沢については、流路の固定と侵食防止のため、流路工と沈砂機能をもたせた谷止工を施工する。</p> <p>2) 滑落崖の安定化対策</p> <p>全体ブロックのすべり面の滑動は確認されていないが、滑落亀裂の変位は収束していない。最大比高15.0mに達する滑落崖の安定を図るため、比高及び勾配を減じる排土工を施工する。</p> <p>排土した土砂は、末端部東側の湛水部での盛土として利用する。</p> <p>3) 末端ブロックの地すべり対策</p> <p>3) 末端ブロックの地すべり対策</p> <p>末端部でダム湖に面しており、地すべり滑動時に移動土塊が流出した位置にあたる。ダム湖に向けて地形が解放していることから、小ブロックとして滑動しやすい地形条件にある。本ブロックの滑動は後背斜面の不安定化を誘発する可能性が大きいことから、抑止工として杭打工を施工する。</p> <p>杭打工に併せて、抑制工としての盛土工を施工する。</p> <p>(2) 中長期の対策方針</p> <p>現在の観測データからは、(1)の対策工を講じることで、一応の安定を確保されるが、必要に応じて以下のような対策を講ずることとする。その際は他に類をみない滑動形態等を有する当該地を防災教育等の活動に利用しうよう保全するなど、地域関係者、学識経験者などの意見を聴きながら対策を進めることも重要である。</p> <p>1) 全体ブロック対策と拡大ブロック対策</p> <p>すべり面の観測結果では、全体ブロック、拡大ブロックとも一体的な滑動をしていないと判断される。このため、拡大ブロック対策は滑落崖の安定化を主体に行い、全体ブロック対策は、地表侵食防止のための地表水排除、山腹面の整形、緑化などの山腹工を主体に計画する。ただし、すべり面の変位については、融雪期の観測結果を考慮する必要があるが、滑動が予測される場合には、地下水排除工を計画をする。</p> <p>2) 監視体制</p> <p>一体的な滑動の可能性は小さいと考えられるが、地すべり範囲が広範囲に及ぶとともに移動土塊が大きく変位している。対策工の施工が中長期に及ぶことから、対策が完了するまでの間にブロックが細分化する可能性があり、継続的な監視体制の構築を計画する。</p>

